

言語社会研究科 博士論文要旨

著 者 プレドヴィッチ・イエレナ
論 文 題 目 「音」から「言葉」へ ― 『風の歌を聴け』『世界の終りとハードボ
イルド・ワンダーランド』『ノルウェイの森』における小説の構造
学位取得年月日 2010年7月31日

本論文は、村上春樹のデビュー作『風の歌を聴け』（1979年）をはじめとし、1985年に発表された長編小説『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』と1987年に書かれた『ノルウェイの森』を分析の対象にして、「音楽」がこれら三つの小説の構造そのものに深く係わっていることを明らかにしようとするものである。

第一章では、まず『風の歌を聴け』の断章1に記述されている「言葉」と文章を書くことに関する言説を取り上げ、「28歳」の「僕」と架空の作家「デレク・ハートフィールド」との関係に着目しながら、語り手の「僕」が「14歳」のころから頼っていた「ものさし」という概念が作者の文章観とどのように関わっているかを、作中で用いられている比喩的な表現を通して考察する。その上で、この小説の構造における「言葉」と、「音」＝「非言語的な」表現のそれぞれの領域を「真ん中に線の引いたノート」に喩えられた断章23の形式にあわせ、「洗いだし」という手法に基づいて「言葉」から「音」への転換の過程を論じる。その際、70年夏の物語の冒頭の時間設定と断章23章の終わりの時間設定を比較し、断章23の終わりの日付（4月4日）の倍数の日（8月8日）から始まるとされる70年夏の物語は、不伝達に終わった断章13の「カリフォルニア・ガールズ」という曲を、即ち「音」の死を起点にもつとする。さらに、この4月4日と8月8日の間の時間的隔たりは断章23の「星マーク」のある空間によって象徴されているのであり、その「空白」が70年夏の物語の「二週間」のあいだに「カリフォルニア・ガールズ」という「歌」が伝達されるまでの時間に対応しているとする。「一週間目」に属するのは、断章23に記述された「言葉」と「連続的」に並べられている数値の羅列、「僕」が寝た「三人の女の子」をめぐる断章19であり、それらを断章23の「右」側に置き、「連続的」な時間における「言葉」――「女の子と寝る」という比喩が「音」を表す数値・比喩に転換される過程を追及する。『風の歌を聴け』の三重構造において「言葉」が「音」に「洗い出されて」いくとき、この小説を流れる時間の「浄化」が行われ、最終的に「二週間」に及ぶ夏の物語はその起点である「7時15分」という断章12冒頭の時間に収束するという循環構造を浮き彫りにする。終わりでは、「二週間」という時間設定からはみ出している断章及び「あとがき」と断章23章との関係を考察する。

第二章では、まず「ハードボイルド・ワンダーランド」の冒頭の時間設定を『風の歌を聴け』の70年夏の物語の「二週間」及び「15分」という時間単位に照合させ、その設定において「音」が果たしている役割を、「無音」から「音の回復」されるまでの「ピンクスーツの女の子」をめ

ぐる言説と合わせて考察し、村上春樹の小説の中で構築されていく「新しい秩序」と「音」との関係浮き彫りにする。次に、「世界の終り」冒頭の時間設定を断章23の最後の一行において「音」の死が語られた時間と関連させ、『風の歌を聴け』における「カリフォルニア・ガールズ」の伝達のあと、「世界の終り」の「街」の「図書館」が、「OFF」状態になった断章23が葬られている場所であると位置づけている。その後で、「世界の終り」と「ハードボイルド・ワンダーランド」の物語の接点を示すために、両物語において言及される「ダニー・ボーイ」という唄の歌詞に着目し、この唄の歌詞及び「世界の終り」の物語で言及される「音声パターン」を、「ハードボイルド・ワンダーランド」の「私」が行う「洗いだし」と「シャフリング」と関連させることにより、この小説においてどのように「数値」が「音」を「語っている」のかを明らかにする。「ハードボイルド・ワンダーランド」の物語における「地下世界」への突入は、『風の歌を聴け』における「歌」の伝達のあとで「閉じられた」語り手の「耳」＝「街」の「門」への突破から始まると解釈する。その上で「地下世界」の通過によりどのように「古い秩序」における「連続的な時間」と「言葉」が「洗いだ」されていくのを示すために、語り手の「表層意識」に関わる物語を身体的な表現と関連付けて考察している。そして「深層心理」レベルの物語を『風の歌を聴け』の「二週間目」に関わる物語と並行させ、両物語において言及される「三つの曲・唄」に着目する。「地下世界」の通過は語り手の内部を映像化として語られ、「暗黒世界」を通過することで「街」の地図に喩えられた「OFF」状態の断章23の「言葉」の領域―「右」側と、「音」の領域―「左」側の間に「ブリッジ」が架けられるようになる。この「ブリッジ」は同時に、語り手の分裂の象徴である「街」の「南半分」＝「体」と「北半分」＝「頭」の間に架けられており、それを通じて伝達される「ダニー・ボーイ」は、分裂した語り手の「頭」と「体」の合体を可能にしているのである。

第三章では、最初に『ノルウェイの森』の第一章に、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の末尾の時間設定及び地理的な要素との接点を認め、『ノルウェイの森』の「僕」と「直子」を中心とする物語を「世界の終りのドラマ」の続きとして捉える。その上で、両小説の冒頭部で「音」が果たしている機能に着目し、『ノルウェイの森』冒頭の「ノルウェイの森」という旋律によって呼び起こされた「草原」の風景の場面を、不伝達に終わった「ノルウェイの森」という曲の象徴として解釈する。「直子」の話における「井戸」の位置と『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の末尾に「ダニー・ボーイ」が伝達されている位置との地理的な類似を確認したあと、『風の歌を聴け』の断章23及び「世界の終り」の「街」の地図に基づいて筆者が作成した「東京」地図（本論第三章・図1）に沿って、第一章と第二章で論じていた断章23の再編の過程をさらに追及する。さらに、『ノルウェイの森』という小説が『風の歌を聴け』の「完全なひっくりかえし」であるという村上春樹の言葉に基づいて、『風の歌を聴け』の構造、とりわけ同小説において「洗いだされた」断章23を『ノルウェイの森』の構造に反映させ、『風の歌を聴け』及び『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』で伝達された「歌+唄」と『ノルウェイの森』における「ノルウェイの森」という曲との関連を探っている。続いて『風の歌を聴け』断章23の「カリフォルニア・ガールズ」の伝達に関わる「5分」と、最後の一行によ

って暗示される「煙草の火」というモチーフを、「キズキ」と「僕」がプレーした「ビリヤード」の場面と関連付けながら、『風の歌を聴け』の断章23における「音」の死がどのように「キズキ」の死を通して「語り直されて」いるのかを考察する。そして「キズキ」の死から「一年」後に設定されている「直子」との再会を、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』冒頭に語られる「僕」と「街」の「図書館の女性」との出会いの場面と関連させ、「直子」との「再会」から「一年」後に行われる「ノルウェイの森」の伝達に至る過程を明らかにしている。

第四章は、『ノルウェイの森』の第四章から語られる「僕」と「緑」をめぐる物語を「世界の終り」の「ドラマII」と位置づけ、この「ドラマ」は「大学」の「図書館」に葬られた断章23の「星マーク」「A」と関連する「正確な言葉」の復活に関わっていると解釈する。「ドラマII」と断章23との関わりを示すために、「緑」の「家」の構造に着目し、「緑」の「家」の構造と断章23の三つの層との比較を通して、「B」曲と「A」＝「言葉」の間にどのように「ブリッジ」が作り上げられているのかを検証する。さらにこの「ドラマII」の循環構造を示すために、冒頭に挿入されている「火事」の場面と、この場面の舞台である「緑」の「家」の「物干し台」の位置に着目し、この場面がどのように断章23の「再生」に関わっているのかを考察する。次に、「緑」の「父」の「見舞い」の場面における「キウリ」のエピソードに注目し、「キウリ」を食べる「音」と、前章で考察した「キズキ」の「ビリヤード」の「ラストショット」が、両方とも『風の歌を聴け』における「C」、即ち「歌」の伝達の場面を変奏していると解釈する。続いて、「見舞い」の場面における「父」の「四つのコトバ」を「世界の終り」の「ドラマI」と関連させる。『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』で作者の「頭」と「体」の合体が行われたあと、この「父」の「コトバ」は、作者の「頭」、即ち断章23における「未完成の小説」＝「A」に関わる「言葉」であると捉え、断章23章の「C」＝「歌」と「A」＝「言葉」との関わりを「四」という数値と関連付けて論じている。この「四」という数値を「ドラマII」では「3+1」という数値に分解し、この「3+1」に基づいて、どのように東京の地図の「左」半分と「右」半分及び「ひっくりかえされた」断章23の「C」と「A」の間に「ブリッジ」が架けられているのかを考察する。この「ブリッジ」の比喩である「蛍」、そして「マッチ」という「モチーフ」に着目し、「蛍」、即ち「東京」の地図の中に築き上げられた「電気サーキット」を通して行われる「正確な言葉」の再生を、「20年」の間繰り広げられる作者村上春樹の「個人的な」「ドラマ」と関連付けて論じている。